© 2020 International Association for Inoue Enryo Research
ISSN 2187-7459

SAKAGUCHI Rikkō 坂口立考. "Philosophy Inspires Technology Innovation: The Enryo Learning Experience – On Empatheme Method," *International Inoue Enryo Research* 8 (2020): 1–29.

【要旨】

タイトル：　技術イノベーションを導く哲学：エンパシームメソッドによる「円了学舎」の実現

キーワード：　学び、メソッド、無意識、哲学、テクノロジー

ネット、スマホ、AI に代表される現代社会。便利なテクノロジーが人々の日常生活にに浸透している。コンピュータ技術によって機械が人間の代わりに思考判断をするサービスや商品も世界規模で広まりつつある。その一方で、それらの過剰な使用や依存がもたらす様々な影響や弊害も明らかになっている。しかし、今や誰にとっても、技術主導の現代社会の全体像は見えづらく、ほとんど選択の余地がない。今こそ、技術に頼り切るのでもなく、敬遠するのでもない、上手な活用によって、人間に備わった力を引き出し、活かすための具体的な実現方法が求められている。言い換えれば、人間がつくりだすテクノロジーそのものを、現代世界の中でみちびく哲学が求められている。日本の近代黎明期、生涯をかけて宇宙と心の不思議を探求し、その哲学を人々に直接語りかけた井上円了はそのあるべき道筋を示すモデルとなる。日本の全国津々浦々を訪れた数は 5000 回以上。円了は知識としての哲学だけではなく、自己の哲学を日々実践し、大学づくりと社会教育に生涯を捧げた時代の先駆者であった。井上円了没後百年という記念すべき節目の年、円了の哲学、生き様にならって、「哲学が技術をインスパイアし、技術が人間に備わった本来の力を引き出す役割を担う」、という具体的な方法を提示するという課題に挑戦した。それが、一般財団法人エンパシームファウンデーションと東洋大学井上円了センターとの協力による「円了学舎」（The Enryo Learning Experience）プロジェクト

である。円了学舎は、現代テクノロジー（エンパシーム・メソッド）を活用し、誰でもスマートフォン上で円了先生のことばとふれあい、日々の自己を結びつけながら、友と学びをわかちあうことのできるプラットフォームである。本研究の目的は、円了学舎モデルの有効性、発展的な応用可能性について明らかにすることである。

実現方法としてまず、円了の膨大な著作から、指針とすべき円了の 100 のことばを抽出することにより円了学舎の基本理念を定め、それを技術主導の現代社会の課題と照らして、次の 7 項目を開発・制作の基本要素と定義した。(1) 日々の継続的な実践環境（2）手のひらにおさまる教材コンテンツ（3）実践作法とシンプルなツール（4）声のことばをベースとしたコミュニケーションプラットフォーム。またこれらの特徴として、(5) 科学的な定量化ができること（6）実践のたのしみを演出するアート要素を含むこと（7）誰もが活用できる技術的プラットフォームとして運用できること。

次に、この指針に従って、スマートフォン円了アプリの開発、円了コンテンツの制作、基盤技術であるエンパシームメソッドを適用し、円了学舎を構築した。基盤となるコンセプト「エンパシーム」は、ひと息ごとの声や微かな手の動きなど、人間の無意識的な身体動作を小さな時間単位として共通の形式で捉え、表現、記録、再現、それらを組みあわせ編集する、米国および日本における発明特許技術メソッドである。エンパシームは、自己の実践プロセスの中身を後からたどり、ことばに写してその単位ごとに共有できるしくみを実現する。教える立場・教材提供が中心の考え方から、円了の哲学にならい、学ぶ人、みちびく人、ガイドする人、手助けする人、みまもり、よりそってサポートする人などを結ぶ、これまでになかった円了学舎「学びのプラットフォーム」がエンパシームによって可能になった。

今回、第八回井上円了国際学会の場を利用して、円了学舎の展示、デモを行った。学会員、一般参加者のフィードバックでは、膨大な円了著作・事績から、初心者でも簡単に円了哲学に触れられるメリットがあること、円了哲学の普及に役立つこと、円了のことばを身につけることを事例にして多様な応用ができることが指摘、また支持された。これを契機に、円了学舎のプラットフォームを利用した東洋大学理工学部生体医工学科の学生による卒業研究が始まっている。

円了学舎の実践的な利用を通して、新たな発展像、応用例が見えてきている。例えば、声の可能性を引き出した英語の基本習得や、幼児との読み聞かせを通じた親

子のふれあい、遠隔コミュニケーションによる日常的なお年寄りの介護や見守りといった、生活の現場における新しい活用方法などが挙げられる。その中で特に重要な視点は、円了学舎が無意識的な「じぶん情報」を定性的かつ定量的に捉え、そのデータによって科学的な実証研究の道をひらくという、これまでになかったアプローチを可能にする点である。

このように、円了学舎は（1）井上円了と円了哲学がより広く知られるための機会を提供する（2）新しい学びの方法、身につけるプラクティスのモデルを提供する（3）発明特許技術にもとづく革新的な、学びの環境を提供する（4）人間に備わった無意識的な力を（声、手の動きなど）引き出す具体的方法を提示する（5）無意識的な状況におけるじぶんに関わる定量的データによる科学的な実証研究の可能性を提示することができた。